

## 論文審査の要旨

報告番号	総論第	13号	学位申請者	松成裕子
審査委員	主査	馬嶋秀行	学位	博士(医学)
	副査	垣花泰之	副査	嶽崎俊郎
	副査	佐野輝	副査	堀内正久

Comparison of rescue and relief activities within 72 hours of the atomic bombings in Hiroshima and Nagasaki

(Comparison of relief and rescue activities that occurred after the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki in 1945)

広島と長崎における原爆投下後72時間の救援、救護活動の比較について  
(1945年の広島、長崎の原爆投下後の救援、救護活動の比較について)

今回の報告は、THESIS「Comparison of relief and rescue activities that occurred after the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki in 1945」としてまとめたものを「Comparison of rescue and relief activities within 72 hours of the atomic bombings in Hiroshima and Nagasaki」を中心に報告がされた。報告の要旨は以下である。

## 【序論および目的】

長崎に投下された原子爆弾のエネルギーは、広島に投下されたものより破壊力は大きい、被害は小さかった。それは、地理的な要因が関与しているが、他にも要因があると仮説した。この研究は、広島と長崎の救援・救護の結果から、その要因、原因からその違いを明らかにし、2つの都市の災害に関する報告書等から情報を分析することである。

## 【材料および方法】

広島と長崎に関するデータは、地理的・人口統計的な特性、救援・救護のシステム、原爆投下とその被害について、文献冊子を検索し、内容を分析した。データの根拠として、広島、長崎復興活動に従事した看護職者の証言も調査した。

## 【結果】

広島では、3つの組織された民間防衛体制があり、県の防空本部と平行して得られる救護の手段があった。長崎では、県の救護本部の指揮系統がはっきりと機能していた。広島では、最初の救援動員の要求はおよそ3時間後に警察の連絡網によってなされ、投下後、53箇所の一時的救護所が、市内で自然に構築された。広島では、放射線被ばく後の出血性下痢の症状について、赤痢が疑われ、速やかに伝染抑制措置を病院で始めた。一方、長崎では、原爆投下後、最初の救助動員要求はすぐに命じられた。長崎で救護した看護師が、原爆投下の前に様々な場所に医薬品等が疎開されていたと報告した。長崎医科大学の医師は、出血性下痢の症状は、赤痢として誤解していなかった。

広島駅は全焼し、鉄道線路は多くの区域の中で壊れた。長崎では、当日、負傷者は救援列車によって4回輸送された。

## 【結論及び考察】

犠牲者数の点から異なる結果の原因には、重大な地理的要因がある。しかしながら、長崎は救護体制が系統的だったこと、両市の救援・救護体制の人員と組織に違いがあったこと、両市の原爆投下後の救護の到着時間に違いがあったこと、列車の機能的な輸送が救護活動に影響したこと、またその間の医療の状況において違いがあった。このことは、死亡者数、生存者の増加に寄与したかもしれない。これらの成果は、今後の大規模自然災害の活動に役立つと考える。

以上、本研究は広島と長崎における原爆投下後72時間の救援、救護活動の違いを初めて明らかにした。よって、本研究は学位論文としての価値を有するものと判定した。